

第9回 人間の弱さを担われた大祭司

4章14節から 5章10節 偉大な大祭司イエス

4章

- 14 さて、私たちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、
神の子イエスが与えられているのですから、
私たちの公に言い表している信仰を、しっかり保とうではありませんか。
- 15 この大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではなく、
罪を犯されなかったが、あらゆる点において、
私たちと同様に試練に遭われたのです。
- 16 だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、
大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。

5章

- 1 大祭司はすべて人間の中から選ばれ、
罪のための供え物やいけにえを献げるよう、
人々のために神に仕える職に任命されています。
- 2 大祭司は、自分自身も弱さを身にまとっているのもので、
無知な人、迷っている人を思いやることのできるのです。
- 3 また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分自身のためにも、
罪の贖いのために供え物を献げねばなりません。
- 4 また、この光栄ある任務を、だれも自分で得るのではなく、
アロンもそうであったように、神から召されて受けるのです。
- 5 同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく、
「あなたはわたしの子わたしは今日、あなたを産んだ」
と言われた方が、それをお与えになったのです。
- 6 また、神は他の箇所でも
「あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である」と言われています。
- 7 キリストは、肉において生きておられたとき、
激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、
御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、
その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。
- 8 キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。
- 9 そして、完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、
永遠の救いの源となり
- 10 神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。

(4章14節から5章10節) 大祭司キリスト論・序論

4章14節から10章31節に亘っては、中心的テーマが「大祭司キリスト論」となっています。そして、今回の4章14節から5章10節までは、その「序論」をなしています。

従って、ここで述べられている事柄は、これから後、様々な形で、より綿密に展開されていくこととなります。その意味で、私たちは先ず大づかみに、「大祭司キリスト論」の中で、この著者は何を訴えようとしているのかに心を向けることが、この箇所を学んで行くに当たり、大事なことと思います。

4章14節

**さて、私たちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、
神の子イエスが与えられているのですから、
私たちの公に言い表している信仰を、しっかり保とうではありませんか。**

この書き出しにおきまして、「信仰の堅持」或いは「信仰告白のための闘いの姿勢」というものを、御言葉の中から読み取ることができます。

それは、この手紙が執筆された頃、丁度ローマ皇帝ネロの大迫害が終わりを告げ、次の新たな迫害が近づきつつある、そうした再度の緊張状態が迫る中で「信仰をどう守っていくべきなのか」或いは「自分たちの信仰告白をどう具体的に生かしてゆくべきなのか」という問題が教会内に起こっていたからなのです。

そのような状況下で、信仰が活力をなくし、教会生活にも倦み疲れた人たちが、近づいてくる迫害におびえている、そのような教会の状態が著者の目に映ったのでしょうか。ですから、本論の目的は、先ず、そういう人々を勇気づけ、元氣を与えていく、更には、信仰の持続性を習得させ、最後まで闘い抜いていく忍耐力を持つように勧めていく、と言えるのではないのでしょうか。そういう励ましを与える意味で、4章13節までの「キリスト論」では、「原理」或いは「基礎づけ」というような事柄を述べて来たと思うのです。

そして、ここからの箇所では、「神の御子イエス」という存在が「大祭司キリスト」でもあるという告白に向けて進むわけですが、この「大祭司」という重要な職責において、著者は「少なくとも二つのことを、ユダヤ人キリスト者に訴えていこうとしている」と考えられます。

<大祭司の職責>

聖所に入って、先ず「神に近づくこと」が大事なポイントで、次のポイントは「神の御声を聴き、それに従って自らが行動すること」です。「自らが行動する」とは、具体的には、神から受けた御言通りを、民に伝えるという行為です。

「たとえ、自分にとって、神からの御言が全く信じられないような事柄であろうとも、実現不可能と思われる事柄であろうとも、『神がお告げになったことは、必ずその通りになる』と信じて、伝える責任が、大祭司にはある」のです。

14節後半で「私たちの公に言い表している信仰を、しっかりと保とうではありませんか。」と述べている以上、この頃の教会は当然「イエス・キリストに対する信仰告白」を何箇条か持っていたのだらうと思います。そこで著者は「それらの信仰告白を土台として、あなたがたの信仰をしっかりと堅持してください」という一つの実践的な勧告を与えているのです。

15節から16節、

この大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪を冒されなかったが、あらゆる点において、私たちと同様に試練に遭われたのです。だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。

ここは、「大祭司イエス」という御方についての御紹介または導入部分です。

「偉大な大祭司」という言葉は、既に14節に出て来ましたが、それは、「偉大な」という形容詞によって「今まで旧約聖書の中に記されてきた大祭司」とは明確に区別される、遙かに優れた大祭司であられることを、「イエス大祭司論」の中で、著者は訴えようとしているのです。 どういう意味で偉大なるかは、15節で詳しく説明しています。

例えば、「この大祭司イエスは、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪を冒されなかったが、あらゆる点において、私たちと同様に試練に遭われたのです。」と著者は説明しています。そして、イエスという御方は、（御父との絶えざる祈りの応答の中で、ひとつとなって生きられたために）御父に対する罪を全く冒されなかった、全く聖なる御方であり続けられたという無罪性、聖性が、その御方の前提として掲げられています。

＜人間の弱さ＞

また「人間の弱さは、イエスの憐れみの対象になる弱さである」と、そういう表現がここではなされています。大変平たい表現ではありますが、実は「同情する」とは、「注目する、それを支える、それを担う」ということを意味している言葉です。ですから大祭司イエスは「私たちの弱さ」に目をお留めになり、それを思いやり、憐れんでくださっただけでなく、その弱さへの解決を与えてくださった御方でもあられます。その一方で、「その弱さは、どんなに優れた大祭司であっても、人間の力では、他者をその弱さから自由にできないほどの弱さなのだ」ということを、著者は述べているのです。

この「弱さ」はそういう意味では「罪」という言葉で表現してもよいと考えられます。

「罪」という言葉も、当時の社会では色々な形で使われておりました。例えば、目に見える病、あるいは欠陥、あるいは社会的な病巣、そんなものを神が忌み嫌われるという意味を含んだ言葉として、『罪』という言葉が当時は使われておりました。

ですから、「あなたの罪は赦された」と告げた場合、それは時には「その人が罹患している病から解放されました」という宣言であつたりしたわけです。そういう意味では「私たちが神から創られた存在として、喜びと感謝を覚えて今日を生きることが困難な現実、それを全部ひっくるめて『罪、ないしは、私たちのもっている弱さ』という言葉で捉えられてきた」と考えてよいと思います」

（現実には戦争、対立、組織内の葛藤と緊張、家庭内の諸問題、そして気候変動を含む各種のパンデミックに晒され、世界は罪に満ちています。罪の大きな概念です）

そうやってまいりますと、私たちは弱さの中で生き、弱さの中でうごめき、弱さの中で神を必死に求めていることが、今日の罪人の姿であると思います。その私たちの罪に対して思いやることができ、それを乗り越えさせることさえ可能な大祭司イエスは、「罪のない御方だけが、この罪を最も強列に感知できる、だからキリストはこの弱さを御自分の身にお引受けくださった」ということになると思います。

<近づくとはい>

私たち一人一人の、そうした現実に対して、4章16節の「**憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために大胆に恵みの座に近づこうではありませんか**」という著者の呼びかけにお応えくださる御方、この「大祭司キリスト」という御方に、私たちは今から、目を向け、心に向け、近づいてまいりましょう、という発信のもとに、この「大祭司キリスト論」が述べられていくのです。

そして、この「**近づこうではありませんか**」というのは、大変興味深い呼びかけだと私は思うのです。というのは、この「近づこう」に使われていますギリシャ語プロスエリコーメタは、「七十訳の聖書」によりますと「祭司が礼拝のために聖所に向かって進んでいく時に使われている言葉」なのです。「近づく：プロスエリコマ」は、距離を縮めることではないのです。「自分自身が贖われ、整えられ、清められ、そして神御自身の愛の中で養われるために積極的に神の前に進み出ていくこと」そういう真の遜（へりくだ）りの意味を持った言葉なのです。

つまり、大祭司が神の御前に進んでゆく時に使う言葉を用いて、私たちに「恵みの座に近づこう」と呼びかけている著者の思いは、「キリスト者すべてが祭司のように聖所に近づくその佇まい、即ち、神への礼拝を通して天なる聖所に近づくために神から召され、集められているということをしっかりと捉え、保ち続けながら、現実の中を生きていこうではないか」というお勧めになっているのです。

主の受肉（100%の神かつ100%の人となられて、私たちの世界に降って来られたこと）、そのために、私たちがその神に近づくことができるようになったことを、「大祭司イエス」という言葉を使いながら、この著者は私たちの心に何度も何度もこの後、訴えかけてゆきます。私たちは、初めから神に近づこうと思っても近づける者ではなく、キリストが近づいてくださることによって、始めて神に近づけるようになったと言うのです。

「キリストの神性」を前提として、その神性告白を堅持しながら、キリストが、更に人間の弱さに近づかれるという憐れみ深い祭儀的行為にお立ちになる「人性的御行為」に対して、私たちはよく考えて見ようではないかと、著者は呼びかけているのです。
そのイエスの祭儀的行為によって、初めてキリスト者が大胆に神に近づける。キリストが神に近づいて執り成してくださることなしには、私たちは神に近づけ得ないのです。

自力では神に近づけ得ない私たちが、神に近づこうとする意志なしには、神は私たちに近づき給わない。言い換えれば、神はすべての人に呼びかけられておられます。とすれば、今日のこの16節の御言葉、「**大胆に恵みの座に『近づこう』ではありませんか**」という呼びかけは、「大祭司キリストなしには、神と出会えないのです」という励ましであり、勧告なのです。

5章1節～4節

大祭司はすべて人間の中から選ばれ、罪のための供え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える職に任命されています。大祭司は、自分自身も弱さを身にまとっているのです、無知な人、迷っている人を思いやることのできるのです。

また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分自身のためにも、罪の贖いのために供え物を献げねばなりません。また、この光栄ある任務をだれも自分で得るのではなく、アロンもそうであったように、神から召されて受けるのです。

5節～6節

同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく、『あなたはわたしの子、わたしは今日、あなたを産んだ』と言われた御方が、それをお与えになったのです。また、神は他の箇所でも『あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である』と言われています。

先ず1節は、すべて人間の中から選ばれる大祭司は、罪のための供え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える職に任命されています。これがレビの家系によるアロン系の大祭司の姿です。

それに続いて5節からは、直接に神に選ばれた個人としてのメルキゼデク系の大祭司（ここではイエス・キリスト）とアロン系の大祭司との比較がなされているわけですが、双方の大祭司は共に「先ず、神から任命されなければならない」と述べています。

<アロン系の大祭司>

アロン系の大祭司についての弱さは、先程にもちよつと触れましたが、その弱さが強調されているわけです。しかし、「この『大祭司の弱さ』とは旧約聖書を幾ら読んでも出て来ない、このことこそが、『ヘブライ人への手紙』が書かれた特色なのです」

「大祭司のもっている弱さ」の中の「弱さ」という言葉は、さっき申しましたように、「罪」という内容を孕んだ言葉と置き換えることができますから、そういう意味で

「大祭司といえども人間であるならば、罪人なのだ、完全な存在ではないのだ、過ちがあるのだ」ということをここでは訴えているのです。

先ず、人間の大祭司がまとっている「弱さ」とは具体的に、どんなものが根本的にあるのかというと、「無知な人や迷っている人を思いやれる存在である。思いやれるというのは同化できることである。そういう素地を自分の中に持った存在である」ということです。もしも同化できるものがなければ、思いやることもできないのです。

だから、彼は自分の弱さ、自分の罪のために、贖いの供え物を献げる必要がある。これなしには彼は神に近づくことはできないのだと、3節で言っています。これはすごく重要な解釈だと思います。「大祭司が神に近づいて犠牲を献げるのは、罪を冒した人々の罪を赦していただくためだけではなく、自分の罪をもそこで贖われて、初めて神の御前に出ることができ得る存在になるためなのだ。だから大祭司が神に近づく際に犠牲を献げることは不可欠な条件なのだ」と述べます。

これが実はキリストと比較してゆく上での大事なポイントになるのです。つまりキリストは元々無垢の御方、神の御子であられ、究極的な一回性の犠牲を十字架上で献げられたのだから、もはや執り成しの祭儀の中で、御自分のための犠牲など必要とされないのです。

しかし、「キリストが、私たちのために犠牲になってくださっていることを覚えなければならない。その記念のため私たちは、礼拝の中で『聖餐式を行う』のです。

「キリストは、『弱さ』ではなく、『聖さ』のために、彼の民を憐れみ、手厚く取り扱うことができる」ということを、ガスリンという方が『キリスト論』という書物の中で次のように述べています。「人間の大祭司は弱さのゆえに、人間の弱さに共鳴できる。しかしイエスは、御自分が聖い御方であられるがゆえに、その執り成しのためには、弱い者を根こそぎ御自分の中に包み込み得る御方であり、そのことのゆえに、私たちを憐れみ、豊かな恵みもてお取り扱いになり、かつ高めてくださる」のです。だから、イエスが偉大な大祭司であられることは、私たちにとって、この上ない幸いなのだ、ということを変に強く述べています。

イエスは御自身のためには犠牲は要らないのですが、御自分を犠牲として献げられたのは、御自分のためではありません。それゆえ著者は、十字架上の贖いにおける『完全性』を語ろうとしているのです。その観点から、イエスが大祭司であられることの意味と、旧約聖書において様々に描かれて人間の大祭司についての意味との相違点が、どこにあるのかに目を向けてゆきましょうというのが、5章冒頭で私たちに語られている事柄です。

それは「神と人間を仲介するにあたって、人間の年毎の罪の贖いを神に取り次ぐ大祭司の役割、それは厳密な意味では、人間の中から選ばれた大祭司では、完全な執り成しを行うことは適いません。それゆえ神は、御独り子を大祭司として私たちの世界にお遣わしく下さり、私たちの罪責を完全に贖って頂けるようお計らいくださった。」ということなのです。

そして4節で「**またこの光栄ある任務を、だれも自分で得るのではなく、アロンもそうであつたように、神から召されて受けるのです。**」と述べているのです。

更に5節で「**同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく、「あなたはわたしの子、わたしは今日、あなたを産んだ」と言われた御方が、それをお与えになったのです。**」は、詩篇2篇7節を引用して、イエスが神の子として私たちの中においでくださり、大祭司として神の任命をお受けになったことを表明しています。この詩篇の言葉は、実は初代教会が旧約聖書を用いてキリストを証ししてきたという『キリスト証言句集テストモニア』という書物からの参照です。

そこに著されたキリストの全生涯は、大祭司としての祭儀的行為のために遣わされて来たのだということを語っています。そういう意味で、詩篇2篇7節のフレーズはこの手紙の中に何度か出て来ます。私は、初代教会が「キリストの証言句集」をもっていたという、その意義には、実に深いものがあると感じています。

6節の「**また、神は他の箇所で、『あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である』と言われています。**」は、詩篇110篇4節の言葉で、やはり「キリスト証言句集」の中にも記されているのです。この書簡作成の中で、何度も何度も繰り返されている一つの主題は「イエス・キリストこそ神の御独り子で、神性を持った御方であると同時に、私たちの側に立って神に近づき、神と私たちとを近づけてくださる御方、完全な仲保者なのです。その意味において、彼は完全な大祭司なのです。」ということです。つまりイエス・キリストによってその職務は完成されたので、それから後は、もはや人間の大祭司は必要なくなったということです。

そして、7節の「**キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。**」以降は、完全な大祭司キリストを紹介する説明文に移っていきます。

ここで、大祭司の「人間の弱さへの思いやり」について考えてみますと、
「人間の**大祭司は、自分自身を越えた神の憐れみという高さから執り成すのではなく、自分自身も痛み（これは弱さゆえに冒した罪への責めの痛み）を身に負ってきたゆえに、人々のそうした痛みを理解し、執り成していけるだろう**」と、弱さゆえの『罪』を自分のバックにして、人々への執り成しを成してきました。

けれども、御子イエスという大祭司は、無論、そういうことではありませんでした。イエスは、人々の罪を、御自分が具体的に罪人たちに近づかれることによって、100%理解なさった。だから、この短い手紙の初めの部分に著者は「イエスが公生涯にお入りになられた段階から、十字架におかかりになられるまでの、すべての人生（およそ三年間と考えられていますが）その中で経験なされたすべての事柄によって、私たち人間の弱さを理解

なされるため、あえて御自分の身をそうした環境にお晒しになったのだ」と捉えているのです。

しかもイエスは、「大祭司キリストとして」神からこの地上に降るよう直接任命されました。御独り子がこの世に遣わされたという中での任命であられるので、アロン系の大祭司とは比較にならないような、まぎれもない大祭司であられる、と告げているのです。

著者がかように随分こだわりながら、イエスが大祭司であられる次第を述べているのは、勿論この手紙を受け取る相手がユダヤ人だからなのです。つまり、「ユダヤ人にとっては、大祭司は侵すことのできない貴い存在なのです。ですから、そういう存在でもあられたと、イエスを大祭司として高く挙げるためには、彼らが納得できるように何度も何度も繰り返し説明する必要があった」ということだと思います。

7節から10節、

キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。そして、完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。

＜完全なる大祭司キリスト＞

ここでは「大祭司キリスト」がどのようなお方であられたのかを述べています。

7節では「キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、ご自分を死から救う力のあるお方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。」と、ここでは随分生々しく、イエスのある極面について述べています。

「イエスが肉において生きておられた受肉の状態から、死にまつわる陰府よりの復活を遂げられて、神の右に挙げられる昇天まで、イエスの地上における生活という形で捉えた日々を『地上におられた時』という言葉で表現している」と考えてよいと思います。

でも、「イエスは昇天なさって終わってしまったのではない」ということも、この言葉の裏側にはあるわけです。イエスの支配は今尚続いておられ、「天に在って今再臨を待っていらっしゃるキリスト」が、ちゃんとこの裏側には述べられているのです。

イエスの御生涯には「肉において生きておられた時」、「その前の先在の時」、更には「帰天された後の時」というのがあって、その間の一時期を、イエスが完全な大祭司になられるため、人間たちとの生活の中で彼らの様々な苦しみを傍受して理解され、神への従順を学ばれるのに費やされた、とも述べられています。

そのイエスが「**激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に祈りと願いとをささげ**」というこの箇所（こういうイエスの御姿の生々しい描写は聖書全

体でここにしかないのです)が、強烈な神の人類への断罪に対して、熱烈なるイエスの抵抗感というものを、これらの言葉によって表現していると考えてよいと思われます
つまり「**激しい叫びをあげた**」ということは、即ち、イエスが御身を挺して罪人を執り成される熱い祈禱を示し、かつ、イエスが私たち罪人一人一人に対して御身を裂かれて「**祭儀的な行為**」をなされている御姿を示しておられると捉えることも出来ると思います。

しかし、そうした祭儀的見地からのみ、「**エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ**」の叫びをも捉えてしまうと、御子キリストの叫びは、人から受けられた「**人類の罪と主の贖い**」における全くの無理解」に起因する御苦しみにも、また。御父から受けられた「**神との断絶という呪い**」に起因する計り知れない御苦しみにも思いが及ぶことなく、それは、御父と罪人なるすべての人類との間の「**和解**」の仲保者（大祭司）として、御自身の立ち位置（完全に無垢で100%の人性を有する人の子）を明らかにされた上で「**贖いの御自身を献ぐ完全な祭儀的な行為を完了されたことを、人々に知らしめるために叫ばれたのだと捉えられ、今日の教会の多くは、そのように語り伝えているのです。**

そのような考えにおいては、「イエスの負われた全人類の罪責の重圧や、その赦し難い罪に対する御父の激高と呪い、あるいは、それらを受けとめる激しい御苦しみということから発せられたイエスの叫び」という面を全く捉えようとせず、そういうことに対して私たち側が当然抱くべき負い目や罪責感をすり抜けて、「**人類の罪の贖い**」という主の御愛だけを大義名分として、イエスの十字架の偉業を片付けてしまう、そんな姿勢が生ずるのではないのでしょうか。（神の義と聖を貫くことから生ずる激痛を捨象し、主の人類愛だけを強調することへの警告です。）

しかし、この手紙の著者は「**エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ**」の叫びを、イエスが御自分の存在を揺るがすような問題として相対され、もう放棄不可能な絶体絶命の状態の中で、大声で叫ばれたものと捉えており、しかもそれは、神と人間の裂け目に立たれたイエスだけがあげられる叫びなのだ、という捉え方をしているのです。

そして、このことは、ゲツセマネの園でのイエスの祈りが、壮絶な神との戦いの祈りであったことも示しています。それゆえ「**血の汗を滴らせて**」というあの表現も、もっと人間的な次元での「**涙を流しながら**」という言葉によって表現されているのです。

「**イエスは涙を流された**」、この本当に耐えかねた状態の中で、人の子イエスは声をあげられたという側面からも、イエスをしっかり捉えてほしいという熱望がこの手紙の著者にはあるのです。

（陰府の世界は、ユダヤの死生観では、御父との応答が全く遮断された呪われた世界でありますから、キリスト・イエス様は究極の裁きの地に御身を墮とされたと言えましょう。しかしながら、十字架上で「人の子としての無垢な御身」を捧げられ、地上での人類救済の使命を果たされたイエス様は、生前に捧げられた血の汗と涙と激しい叫びによる熱禱が受け入れられて、陰府においては、御父の呪いによって遮断された応答が解かれ、和解が成立して、地上への甦りが叶えられたのだ、と思います。 森）

＜パスカルの「パンセ」から＞

パスカルの書いた「パンセ」の553番というところに「イエスの秘儀」という箇所があります。その中から幾つかの部分を取り出してご紹介しておこうと思います。

「イエスは、その受難においては、人々が彼に与える苦しみを忍びたもう、だがその最後の苦悩においては、我と我身に与えられる苦しみを忍びたもう」と記され、更に

「それは、人間の手から来る苦痛ではなく、全能の御手から来る苦痛である。何故ならそれに処するには、イエスも全能であらねばならないからである。」と記されています。

、

このことの意味は、神が全能者であられるように、キリストもまた全能者であられなければ、神が裁かれる人類の罪を贖い、完全に取り去ることは適わない。だから、イエスが負われた苦しみは、人間がイエスを十字架に磔にしたという肉体的な苦痛ではなく、「*全き人類愛に根差す全能の贖い主なる御子イエスに対峙して、その贖いを虚しくしようとする、全き義の審判に根差す全能の裁き主なる御父から突きつけられた挑戦」であり、イエスがその戦いにおいて、どんなに苦しまれたかということを表しているのです。

（* これは、罪なる人類を審かれずにおかれぬ全き義なる御父と、その人類を贖い救わずにおかれぬ全き愛なる御子イエスとの『全能者対全能者の壮絶なる戦い』を示しています。この戦いにおけるイエスの勝利宣言こそが、『成し遂げられた』であられたと思います。 森）

「イエスは、弟子たちからの御父への切なる執り成しを求めたもうた。」そのようなことは、思うに、主の全生涯の中で唯一度きりであられた。だが、主はそれを得ることができなかった、弟子たちは眠っていたからである」それがゲツセマネの園での出来事だった。

「イエスが人生でたった一度『わたしのために祈ってくれ』と願ったその訴えさえも、弟子たちには聞き届けられなかった。」最後の決定的な裂け目というのは、こんな形でパスカルの目には映っていたのだらうと思います。

「イエスは、その弟子たちの眠っている間に、彼らの救いを準備された」私はこの箇所を読みながら、「わたしのために祈ってくれ」と言われているのに、それを裏切っている弟子たち、それに応えられない弟子たちがいる。彼らが応えられない実態の中にいるにもかかわらず「裏切った人々をも赦して、それを深い情けと憐れみとで包んでいるすごいイエスの姿」に、思いを馳せるのです。

「あなたがたの肉体はそんなに疲れているのか」と理解されて、それをそのまま受け入れて赦してくださる。御自分自身の足下が地の底にまで崩れ去る危険の中で、せめて、そうした危険の中にあることを理解して祈ってくれと願いながら、それが聞き届けられなかった弟子たちに対して恨み事を言われるのではなく、尚も彼らを憐れみ、赦す愛で包み込んでいかれるというイエスの御姿は、カルバリの丘の十字架の上で、もう一度、私たちに鮮明な形で、「父よ、彼らをお赦しください」と懇願された御姿に重なるのです。

「イエスは、その友がみな眠りこけ、その敵がみな目を覚ましているのを見、その身を全きに父に委ねたもうた」イエスの頼りになるはずの愛弟子が全員眠ってしまっていて、イエスを疎外しようとする者だけが目覚めていて、イエスに対して挑戦し続けている。その中でイエスは御自分の身を神の御手に完全に委ねられた。それは、地上においては、もはや敵のなすままに任せられたという形を取られますが、しかしながら、御父こそがそれをお赦しになられたのだとすれば、イエスはそれを喜んでお受けになった次第なのです。ここに「どうかわたしからこの苦い杯を取り除いてください、しかしわたしの思いではなくあなたのみこころをなさってください」という「神への全幅の信頼が出て来るわけ」です。私（松山幸生先生）は、そういう意味で、イエスの大祭司性とは、『神への決定的な従順』ということに裏打ちされているのだと見ています。

イエスは、

- ① 「神が召してくださったその召しに対して、忠実であり続けられた。」
- ② 「神に対しては、どんな状況の中でも絶対に服従なされた。」
- ③ 「神を決定的に畏れ敬い続けられた。」
- ④ 「自分の身を献げ尽くして、神の御言に従順であられた。」

（この四つのポイントを、イエスはきちんと御生涯の中でクリアなされた、そのことが『メルキゼデクに匹敵する大祭司なのだ』と、この手紙の中で述べている根幹的な理由なのではないか）と思うのです。）

死から救う力のある御方に対する、イエスの祭司的な祈祷、更にそれに対する苦禱・熱禱という要素が相まって『イエスが死人の中から甦られた』という形で、神に完全に聴き入れられました。

つまり、自分が生きて神の御力を示すのではなく、自分の身を献げ切り、自分に死んで、唯、神の御力を具体的に人々の前に明確にする、という生き方が、実は大切なのです、それゆえ、正に迫害の中に置かれようとしているヘブライの人々に向かって、パウロが「命を永らえることが救いなのではなく、あなたの命が損なわれたとしても、そのことを通して神の力が具体的に歴史の中に働くことこそが、あなたがたが召され、神の民であるということの光榮ある務めなのだ」と伝えているわけです。ここはある意味「殉教を覚悟した形での信仰告白が求められている」と言えると思います。

今、私たちを包んでいる歴史は、生ける神、主なる神を受け入れない（無視・無関心・無感動なる）歴史です。ですから、そこで、私たちが神を神として受け入れることには、ある意味「殉教」を覚悟してなさなければならない信仰の告白があると言えます。「殉教」即ち「自我に死して、神を畏れ敬う（7節）」、これはやはり非常に重要な覚悟だと思うのです。

（私は何度か松山幸生先生から、殉教の覚悟が必要な時代が来る、その時に信仰が問われるとお聞きしました。先生は覚悟を持って国会の前で祈られました。）

第8節から10節、

キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。そして、完全な者となられたので、ご自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。

ここの9節で述べられている「キリストは完全な者となられた」とは、別な言い方をすれば「私たちのすべてのいたずきを完全に乗り越えられた、あらゆる罪を完全にその足下に踏み据えられた、そして、罪の実の究極である死をもイエスは打ち破られた」そのことを全部まとめて「イエスが完全な大祭司である」という言い方をしていると思います。

イエスは神として人間に近づき、彼らの弱さを十分理解されて、全き大祭司となられた。それはとりもなおさず、御子が全き人として神に近づく道を全うされたことでもある。その歩まれた模範が神を敬う生き方、神の御言に徹頭徹尾聴き従ってゆく生き方であられた。このことを通して、今度は、私たちが、このキリストに聴き従う者にならなければならないと思います。

「神を畏れ敬う」ことは、ただ単に私たちがそういう気持で生きることではなく、神が私たちに求め給うことを「100%の達成」を掲げて、それが成し遂げられるように祈りつつ『自分自身を神の御前に差し出し続けて、献身の道を生きてゆくこと』ではないかと思うのです。

その時初めて、私たちはこの世のために執り成すことのできる者、言い換えれば、神から召された祭司としての役割を担える者、この歴史に対して証しできる者、になっていけるのではないのでしょうか。「キリストは私たちの模範として大祭司となってくださいました。だから私たちは、この御方を慕い、この御方に導かれ、『この世に執り成しをもたらず祭司』として生きて行こうではないか」という呼びかけが、この後に続いていくわけです。それは「あなたがたの命を窺う者のためにも、自分の命をキリストに差し出して従っていいのではないか。そうして、敵なる者から離れ逃れるのではなく、その彼(女)のためにこそ、キリストと共に祈っていいのではないか、という呼びかけが生まれて来る、そんな大きなうねりを作っているのだ」と言ってよいと思います。（1996年9月14日）

説教

「いざ、キリストの心をまといて」

ペトロ第一の手紙 4：1－6

森 容子

本日のテキスト4：1－6は、特に、異邦人がキリスト教に改宗したことにより、主との関係が強く結ばれて、魂に変革がもたらされた。もはや彼らは、キリスト者になる以前のような生

活に戻ることはできない。そして、その証しを伝えることこそ、至福への道であることを、読者に銘記させることを中心に語っています。では、テキストに入ってまいりましょう。

1節 キリストは肉に苦しみをお受けになったのですから、あなたがたも同じ心構えで武装しなさい。肉に苦しみを受けた者は、罪とのかかわりを絶った者なのです。

神様は、私たちを礼拝者として、神の証し人として、新たにお立てになる際、私たちが長年慣れ親しんできた「罪」との関わりを絶つことを切望され、多くの聖句を通して私たちに迫って来られます。例えば、1：14「**無知であった頃の欲望に引きずられることなく**」とか、2：11「**魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい**。」等と。

ですが以前の私たちは、もしかすると、これまで、罪を「神様に対する罪」として深刻に捉え返すことをせず、ただ、周囲の環境に押し流され、生まれながらの心のままに「罪」との馴れ合いを続けてきたのかもしれない。それが、私たちから主なる神様を遠ざける、大層危険な罠であるとも知らずに・・・。

しかしながら、一旦、キリストにとらえられ、信仰の光に照らし出されますと、影としての「罪」が心の内の異物として、痛みとして、その存在を現してまいります。そうすると、その人はもう居ても立ってもおられません。けれども一方で、日頃から慣れ親しんできた「罪」の習慣とも、そう簡単に手を切ることもできません。心の板挟み、ジレンマ状態です。

この「罪」の問題は、自分を信じ、自力で何とかすれば、解決することができるのでしょうか？ 一時的には解決できたかのようにみえても継続は不可能で、無理を重ねたダイエットのように、すぐにリバウンドして元に戻ってしまいます。それどころか、もっと悪化してしまうケースもあります。

<罪の解決法>

ですから、「罪」の解決法そのものを転換しなければなりません。そこに登場するのが、今日の1節前半のお勧め「**あなたがたも、キリストと同じ心構えで武装しなさい**。」です。つまり、解決の中心に、自分ではなく、キリストを置くことです。模範としての主イエス様の生き方と御言を仰ぐのです。そして「罪」に対し、主における武装を成すのです。

無論、主は、罪を冒された方ではありませんでしたが、「罪（悪の諸力）」からの多大な誘惑や攻撃にさらされ続けた生涯を送られた御方ではあられました。そして、神であられながら、同時に人として、それらを苦しまれ、御父に向かい、ひたすら祈られた御方でもあられました。ですから主は、人間の弱さに対する最も優れた理解者であられ、「罪」と戦う者と共にあって、力強く導いてくださるのです。

キリストがお受けになった「肉の苦しみ」と言いますと、まず十字架・鞭打ちにおける肉体的苦痛の面を連想しますが、この手紙ではそれよりも、十字架に至られるまでの艱難や迫害、耐え難い程の精神的屈辱、罵詈雑言、血の汗を流して祈られねばならなかった苦悩・悶絶の状態を表わしていると思われます。

<主の武装>

では、この時イエス様は、ご自分を取り巻く悪の諸力に対してどんな「武装」をなさったのでしょうか？ エフェソ書6：13-18にこんなお勧めがあります。

だから、邪悪な日によく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるよう

に、神の武具を身に着けなさい。立って、真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け、平和の福音を告げる準備を履物としなさい。なおその上に、信仰を盾として取りなさい。それによって、悪い者の放つ火の矢をことごとく消すことができるのです。また、救いを兜としてかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい。

つまり、「神の武具」とは、真理・正義・平和の福音を告げる準備・信仰・救い・神の御言、そして熱心な祈りの継続で、まさにこれを完全装備なさったのが、イエス・キリストという御方です。この「武具」は、宣教の始めに、荒野でサタンから挑戦された三つの誘惑を、見事に退けられた際にも十全に用いられました。

また、2：23に「**ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。**」とありますように“苦難の僕”としての全き従順、静かなる祈りの整い、御父の御心に委ね切られた柔和と忍耐と謙遜のお姿にも、主イエス様の特別な武装の在り方がよく表されています。

1節後半に「**肉に苦しみを受けた者は、罪とのかかわりを絶った者なのです。**」とありますが、何となく論旨が一足飛びで、分かり難い聖句です。少し言葉を付け加えてみますと、「**キリストと同様に、善なる神の御心を行って迫害等の肉の苦しみを受け、その受けた苦しみにも拘らず、それを超越して尚、神に従い続けた者は、もはや罪との縁を切った者と見做される。**」ということを表わしています。

よって、受難のキリストと同じ心構えや考え方を持つことによって、「神の武具」を装備でき、それによって“罪＝悪の諸力”に勝利することができるということです。「武装」とは、即ち「キリストの心をまとわせて頂くこと」です。

2節 それは、もはや人間の欲望にではなく神の御心に従って、肉における残りの生涯を生きるようになるためです。

時に、人から中傷や迫害を受けるよりも、他者の意思に服従し、過剰な謙遜に身を包まなければならないことの方が、自尊心を傷つけられて、耐え難く思われることもあります。

けれども、キリストの心をまとして、生きようになった者にとっては、主への服従や謙遜の整いは、むしろ無償のこよなき喜びと変えられ、自分の残りの生涯、即ち、そこから始まる“本当の生涯”を「神様が褒め讃えられるために献げたい」と自ら祈り願うようになります。

そんな真骨頂が、ガラテア書2：20の「**生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。**」に現されています。

ある牧師の葬儀で、司式者が先生の生きざまをこの聖句によって表わされたとき、先生を知る参列者一同が、深い同感と、えもいわれぬ感慨に浸されました。

、

3節 かつてあなたがたは、異邦人が好むようなことを行い、好色、情欲、泥酔、酒宴、暴飲、

律法で禁じられている偶像礼拝などにふけていたのですが、もうそれで十分です。

ここで、気高い信仰の世界から一変して、自分たちの足元、現実世界に引き戻されます。

以前におかした諸々の罪は、「臭いものには蓋を」の方式で、一旦、信仰という重たい蓋を被せることによって、そのまま「封印」できるかのように錯覚してしまいがちです。しかし時に、厭な臭気がその蓋を突き抜け、人格の底から立ち上がってくるのです。これは、本当に他人事とは言えないことです。

ですから、もう一度、忌まわしい罪の記憶の蓋を主と共に開けて・・・かつての自分を、気高い信仰の視点から見つめ直し、悔い改めと心の整理をつけた上で、こんな経験はこりごり、ほとほともう沢山と、「封印」ではなく「完全消去」を、自分でなく主に委ねて、行う必要があるのです。

皆さんにとって「**好色、情欲、泥酔、酒宴、暴飲、律法で禁じられてる偶像礼拝など**」と並べられている罪の事柄、偶像礼拝はともかく、これらは、ご自分と全く関わりのないこと、と思っていらっしゃるではありませんか？

しかし、これらの罪は直接には性やお酒にまつわる「はしたない罪、汚らしい罪」ですが、深く意味していることはそればかりではありません。

私たち人間は本来、目の欲、耳の欲、舌の欲、心の欲など、あらゆる欲望と共にあり、いわば、欲が服を着て往来を歩いているような存在であることを自覚しなければなりません。

そのことから目をそむけず、内に潜む「罪」や「罪の記憶」を十分に認め、主との関係性においてそれらをきちんと清算して頂いてこそ、キリストの心をまとうに相応しい整いがなされるのです。

4節 あの方たちは、もはやあなたがたがそのようなひどい乱行に加わらなくなったので、不審に思い、そしるのです。

そのようにして、主の御前に「罪」を解決する方向が指し示された後に、またまた次なる課題が立ち現れてきます。かつての乱行の仲間が、やっと回心した者に触手を伸ばしてまいります。「そしる」という形をとって・・・。

「（彼らに）加わらない：」という言葉の語源は、「一緒に走らない」という意味で、快楽を底なしに追求し続ける、熱狂的な“走り方”を断固拒否するということを表わしたものです。

ルカ福音書15章の放蕩息子とその父の生き方も・・・反抗期の次男に手を焼き、望み通りに相続財産を渡すと、家を出て行った息子にホッとしたものを感じた父親と、その財産を瞬間に使い果たして父親を裏切り、自己の尊厳を打ち壊し、命の破滅へとまっしぐらに突き進んでいった次男。しかし、ボロボロになり、もはや仕え人にと決心して家に帰り着いた次男に対し、著しい後悔を抱え続けてきた父親が、今の次男のすべてを受けとめ、抱きしめて、二人は和解と確かな回心へ導かれます。

この二人のbefore/after、以前とその後における大変化は、そこに深く関わって来られた主の御臨在、他ならぬ主の御導きによるもので、今や、彼らがキリストの心をまとっていることを、確かに証しするものなのです。その後の次男や父親への周囲からの攻撃には、2：12にこうあります。「また、異教徒の間で立派に生活しなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしてはいても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神をあがめるようになる

ります。」また、3:16にも「穏やかに、敬意をもって、正しい良心で、弁明するようにしなさい。そうすれば、キリストに結ばれたあなたがたの善い生活をののしる者たちは、悪口を言ったことで恥じ入るようになるのです。」とあります。

5節 彼らは、生きている者と死んだ者とを裁こうとしておられる方に、申し開きをしなければなりません。

人が、自分の人生の悪行を、他者に弁解・釈明することは容易ではありません。ましてや、回心した者をそしる罪人たちが、審判者なる神の御前で、申し開きなどできようはずがありません。キリストをまもっていない彼らは、虚言を重ね着していても、丸裸だからです。

生きている者・死んだ者のすべてに、いつの日か必ず、最期の審判の時が訪れます。そのときには、“一刻の猶予もなく”厳然と、天の御父は恐らく眉ひとつ動かされず、あなたは右へ、あなたは左へと裁かれるでしょう。

そのときには、地上で価値の輝きを放っていたもののすべてが、何の役にも立たず、何の意味も成さず、唯、弁護者なるキリスト、贖い主なるキリストを、しっかりとまもらせて頂いている者だけが、その審判を確実に免れうるのです。

では、私たちのように、この世で真面目に教会生活、礼拝生活を守り、洗礼や信仰告白に与った者だけが、「罪」の裁きを免れて、神の国、新天新地へと誘われるのでしょうか？

6節 死んだ者にも福音が告げ知らされたのは、彼らが、人間の見方からすれば、肉において裁かれて死んだようでも、神との関係で、霊において生きようになるためなのです。

この「死んだ者」の解釈には諸説ありますが、このテキストの直前、3:18-20に記されていることに、大きなヒントがあると思います。

キリストも、あなたがたを神に近づけようとして、自らは義なる方であるの

に、不義なる人々のために、ひとたび罪のゆえに死なれた。ただし、肉においは殺されたが、霊においては生かされたのである。こうして、彼は獄に捕われている霊どものところに下って行き、宣べ伝えることをされた。これらの霊というのは、むかしノアの箱舟が造られていた間、神が寛容をもって待っておられたのに従わなかった者どものことである。

このことを踏まえると、6節冒頭の「死んだ者」とは、キリストが「肉においては殺されたが、霊においては生かされた」と同じ恵みに与かる者でありましょう。それと同時に「神が寛容をもって待っておられたのに従わなかった者ども」でもあります。そして、キリストは、「獄に捕われている霊どものところに下って行き、宣べ伝えることをされ」ました。

こうして、この世では残念ながら、または頑なな心で、キリストの心をまとうことができなかった者も、死後の世界で、キリスト自らの福音宣教に与かるのです。

このことは、陰府の世界に主の福音の光が差し込まれてゆくという、大いなる希望、信じ難い救いの光景を告げ知らせています。これはある意味、聖書中、最も胸打たれる、冒しがたい聖なる輝きを放つ御言の1つと言えるでしょう。

こうして、主による第二の福音のチャンスを経て、陰府の暗闇の中から、キリストの心をまとう者たちが次々と、次々と起こされてゆくのです！

ですから、これらの人々の最期の救いの御業に参画するためにも、この世にある私たちは、教会を通し、福音の喜びの種を、黙々と、唯ひたすらに、地域社会に蒔き続けなければなりません。この世においては、目に見える実りと収穫があるうがなかるうが、その重大な種蒔きのためにこそ、私たちは主に召されているのです。

いざ、キリストの心をまといて私たちは、御国の門で、待っていて下さるキリストの胸に飛び込む日を夢見つつ、これからも、礼拝と伝道の日々を、共に手を携え、喜び勇んで、歩んでまいりましょう！

しばし、黙祷をお捧げしましょう。

<写者あとがきⅠ> 2022年3月19日

今私は、くすしきみ恵みの只中にあります。この9回目は2022年4月17日のイースターに掲載することになりました。受難と復活の時を、今までにない心の深さで過ごしております。教会が遠いことを理由に礼拝に熱心ではありませんでした。「ヘブライ人への手紙に学ぶ」を写書させていただくことを通して、鈍く、且つ我儘な私の心もやっと神に呼び覚まされました。言葉では礼拝の大切さを語りながら、行動は反対を向いておりましたこと深く懺悔します。無知の罪を深く自覚しております。

神は罪を憎み裁かれる、断罪されることを私は忘れていました。この基礎的な認識を捨象してしまっていたのです、長い間。学生時代に神学生の方に質問したことすら忘れていました。神を恐れ敬うことなしに救いを賜うことはできない。しかし、救いは約束されていた。旧約聖書の預言から受難・復活の秘儀に至るまで、通奏低音のように響いていたのが神の義であると。しかし私はそれをしかと確信する信仰を持ちえなかった。

神はどこまでも愛を注いでくださり、時を得て「ヘブライ人への手紙に学ぶ」を与えてくださった。時に適うことは必然であるかも知れないが、無知の自覚は深く、後悔もあり、受難と復活に関する説教への飢餓があり、体力の限りを尽くして読書に没頭しているところでは。何という恵みでしょう！「こころははやっても、肉体を弱い」しかし「立て、行こう。大胆に恵みの座に近づこう。」かつて、教会が恋しかった若い時代の、あの求める心が蘇った感じを抱いています。明日の礼拝が待ち遠しい、何十年ぶりの覚醒です。

「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の一語一語に新しい学びがありますが、現役時代に最も苦労したコミュニケーションとの関連で松山幸生先生が教えてくださった「アイデンティフィケーション」という言葉はまだ他の本には見出せませんが、徹底して「相手の立場に身を置いて歩まれ、語られたイエス」（本文p106）との説明に加えて、「インカーネーション」受肉、低くする、くだる、降下する「自分の高さをかなぐり捨てて、より低いものに添えるように自分の身を沈めていくこと」、それを神がなさってくださった故に栄光が輝いた。復活信仰の基が据えられた。そのような理解をしています。私にとっては身近な問いでありましたので、親しみのある言葉で説明していただき、納得感が深まりました。

「人は一生の間のどこかで必ず聖書を手にする」と言われていますが、聖書は手にし易いですが、難解です。とても独りでは読み進めません。それは、今、この恵みの作業をしながら実感しているところです。句読点ひとつ、一行の行間の深さと広さ、時間と空間の移り変わりの激しさは甚く私に感じられます。

幸いにして、森容子先生の丁寧なお導きを賜り、正しく写書することができております。感謝でございます。罪深き者です。この歳になってと思わないわけではありませんが、この歳になってやっと辿り着いた、そして、まだ僅かに残る力を振り絞り「夕暮れに光あり」を証ししてゆきたいと祈っております。（2022年3月19日 小原靖夫）

<写者あとがきⅡ> 2025年9月10日

1、ヘブライ人への手紙には「大祭司」が19回出てきます。

また大祭司論が7章まで続きます。今回の理解を深めるために関連する4箇所を選びました。（10章の11節以下の箇所は大祭司ではなく、祭司となっていますが、同じ意味だと解釈しました。）

2:17 それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。

4:15 この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。

7:27 この方は、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために毎日いけにえを献げる必要はありません。というのは、このいけにえはただ一度、御自身を献げることによって、成し遂げられたからです。

10:11 すべての祭司は、毎日礼拝を献げるために立ち、決して罪を除くことのできない同じいけにえを、繰り返して献げます。しかしキリストは、罪のために唯一のいけにえを献げて、永遠に神の右の座につき、その後は敵どもがご自分の足台となってしまうので、待ち続けておられるのです。なぜなら、キリストは唯一の献げ物によって、聖なる者とされた人たちを永遠に完全なものとなさったからです。

2、この著者がなぜ、繰り返し執拗に大祭司を論ずるのか、

この手紙の読み手が第二世代のユダヤ人キリスト者であること。そして、彼らの信仰が揺らいでいてユダヤ教に回帰する危険性を感じ取り、旧約聖書における大祭司の働きを思い起こさせ、偉大な大祭司イエス・キリストこそ真の救い主であることを理解させるために、大祭司を用いたのではないかと考えました。。

しかし、それは浅はかな考えであることに気付かされました。罪人なる私が救われる為に御子イエスがなさってくださったことの意味を深く学び、味わう時を与えられました。聖書の学びは尽きることがないことを実感しました。大祭司論を繰り返し学ぶことによって御子イエス・キリストのご恩寵が重くかつ親しく感じられるようになりました。

3、松山幸生先生の踏み込んだ解説

その中でも私が今回特に学ばせていただいた人間の弱さを担われた大祭司、イエスは救いの業が完成するまでに、どんなに苦悶されたか。人間の罪の赦しは神以外にはない。どんな罪も神の赦しなしには贖われない、

神の御心は果てしなく広く、それぞれの人の戸口に立っておられる。神との応答するには、人はその戸を開けるだけである。（大胆に恵みの御座に近づこう）

イエス・キリストは神の御独り子で、神性を持つ御方であると同時に、私たち罪人を憐れみ、神と私たちとを和解により、近づけさせてくださる御方——完全な仲保者、完全な大祭司、御子イエスという大祭司、こんなことを思い巡らしています。そして次の大問題に挑戦しました。

森容子先生の忍耐強いお導きをいただき、まとめました。

4、エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ

ヘブライ人への手紙；5章7節

「⑦キリストは肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。

⑧キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。そして完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の命の源となり、神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。」

このようなイエスの苦痛、熱痛の生々しい描写は、聖書全体でここしかないと言われ森先生から教わりました。この激しい叫び声から「エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ」（ヨハネによる福音書では『渴く』）、を思い起こしました。

数年前に、この原典訳は「わたしの神よ、わたしの神よ、何のために、あなたは、わたしをお見捨てになられたのですか」だとも教わっていました。

ヨハネによる福音書19章28③0節を引用します。

「28この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り『渴く』と言われた。こうして聖書の言葉が実現した。30イエスは、このぶどう酒を受け取ると『成し遂げられた』と言い頭を垂れて息を引き取られた。」

今まで、私は「成し遂げられた」ことを曖昧に理解していることに気づいたのです。そこで再び森先生にお伺いしましたら、「成し遂げられた」のは「人類の罪の贖い（全ての罪責の請負）の成就です」との答えを頂き、納得したのですが、森先生は、更に「キリストが陰府に下り得る条件（父なる神に呪われた者）の成立と実行、更に、御父の御心によ

る、陰府からの御復活、御昇天、即ち神の御栄光を現す準備の完了」とも解釈できるのでは、と言われました。

そこで私は再び問いました。ヨハネによる福音書19章⑳節の「聖書の言葉が実現した」とあるのはどの箇所ですか、とお伺いすると、「それはヨハネによる福音書5章㉔節から㉓節（＊下記参照）です」と即答された。そこにはイエスが陰府に下ることがはっきりと預言されているのです。罪なきイエスは人類の罪の贖いのために全ての罪責を自らに引き受けられたために父なる神に呪われ、裁かれ、陰府に下らねばならなかったのです。聖なる神の義を貫徹するということの厳しさが身に迫ってきます。御子であっても容赦なく断罪される・・・。

しかし、御子イエス・キリストは大祭司としての役目も忠実に果たすために、陰府に下られるほどまで神に従順であられ（義の貫徹）、人類の為に罪の贖いを父なる神に苦祷、熱祷し、（陰府でもどれほど祈られたか・・・）ついに聞き入れられ、成就された（愛の貫徹）。そのあかつきには、陰府から解き放たれることになり、復活させられ、神の御栄光を表されたのです。この「義の貫徹」と「愛の貫徹」の壮絶な戦いと実現が十字架の上にあることを学ばせていただきました。人の弱さを担われるということが、どんなに大変なことか。罪の深さに慄き、神の愛の深さに感極まります。

この度は、自分の知識のなさにうなだれていましたが、光が射して来た時に思ったことは、聖書は順を追って読まねばならない。福音書を辿る上で論旨を一つ一つしっかり身につけていないと、その後は理解不能になる可能性があるということ。更に、旧約聖書の基礎知識が必要だと、やはり創世記から読まねばならないことを知りました。時、既に遅しの観もありますが、与えられた時を大切に、体力を維持して学び続けたいと思います。

2025年9月6日

＊ヨハネによる福音書5章㉔～㉓

㉔はっきり言うておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。㉕父は、御自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようにしてくださったからである。㉖また、裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。㉗驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいるものは皆、人の子の声を聞き、㉘善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出てくるのだ。